氏　　名	嶋本（しまもと）　浩子（ひろこ）
学　　位	博士（芸術学）
学 位 記 番 号	博（芸）甲 第 18 号
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 13 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 3 項該当
論 文 題 目 名	鈴木大拙と仙厓の書画 ―不二思想を中心として―
審　査　委　員	主査　倉澤　行洋 副査　Horst Siegfried Henneman 同　　市川　悦也

一、論文内容の要旨

一九五九年一月から満一ヶ年、ヨーロッパでの最初の禅画展である「欧州禅画展」がドイツ、スイス、デンマーク、イタリアなどを巡回して開かれた。次いでパリで開かれた「日本芸術のなかの彼岸」展では出品作の3分の1が禅画であった。そして一九六一年から一九六四年にかけて「仙厓欧州展」がヨーロッパ各国を巡回して開かれた。この三つの展覧会に出陳された禅画は二四〇点に達した。折からヨーロッパでは禅についての関心が高まりつゝあった時期であったから、これらの催しは相当大きな反響を起こした。特に仙厓の名は多くの人々の知るところとなった。そこで「仙厓欧州展」の図録とは別に恒久的な図録を作ることとなり、ここに大拙の最晩年の著作「*Sengai* The Zen Master」が生まれることになった。

本論文はこの著作に触発されて成ったものである。

本論文は全十二章の本論と「前書き」「序論」「結論」とより成る。以下にその大要を述べる。

序論

大拙と仙厓の生涯と、両者についての先行研究が述べられる。このうち仙厓の先行研究については、これに四つの方向性があるとする。すなわち①伝記的研究、②書画についての美術史的立場からの研究、③書画を境涯と関連させての研究、④学僧としての仙厓の研究、である。このうち③に属する先行研究者として鈴木大拙、久松真一、古田紹欽、倉澤行洋の名を挙げる。本論文の論者もこの方向での研究を志向する。

以下に論者自身による各章の概要を揚げる。

「第一章　英文著作 *Sengai*」において、大拙の最後の英文著書となった *Sengai* 著作の背景を検証した。*Sengai* 著作の背景には、一九六一年から一九六四年に亘る仙厓欧州展がある。*Sengai* には、仙厓欧州展の恒久図録の意味もあった。当時の欧米では禅の受容が高まり、日本の江戸時代の禅僧による書画が紹介された時期であった。しかし、仙厓欧州展において、禅画に対する評価が、宗教の視点と芸術の視点との二極化が生じただけでなく、イギリスの作家のアーサー・ケストラー Arthur Koestler（一九〇五―一九八三）による禅批判が発表された時期でもあった。このような欧米における禅と禅画に対する反響を顧みて、大拙は、仙厓の書画を通じて、仙厓の人柄が「よき禅僧は大智と

大悲を体現している」理想的な人間像として紹介したのである。

「第二章　不二思想」では、大拙が西洋にむけて二元論理に対する警鐘を鳴らしたことを示した。そこで、二元論、一元論、不二一元論の構造性を考察したうえで、大乗仏教の不二を示した。大乗仏教の不二は、インド古来のシャンカラの不二一元論とも異なる構造性を持ち、大乗仏教の空思想と深く関係していることを述べた。

「第三章　大拙と西洋」では、大拙と西洋との関連性を示した。大拙の英文著作のうち、西洋で最初に認められたのは、『大乗起信論』の英訳であった。それには、大乗仏教の空思想が西洋社会において虚無と誤解されていたことと関連があった。それは、西洋社会における仏教の受容が植民地政策と関連していたからである。そこで、西洋が受け入れた仏教は上座部仏教であり、上座部仏教の諸法無我の思想が、当時の西洋社会におけるニヒリズムと共通する視点があることを示した。そのような時代性を示すことで、大拙が大乗仏教や禅に関する英文著作活動を行った基本的理由を示した。

また、時代は下がって、一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、大拙が西洋で受け入れられたのは、大拙が示す、禅の自由による。当時、ニヒリズムから発展した実存主義が時代を席巻していたが、大拙が示した禅の自由は、自由を外に求めるものではなく、自分自身の心の束縛からの自由の重視こそ、大拙が禅を通じて表明したかったことである旨を述べた。

「第四章　大乗仏教の思想」では、不二の構造性を知るため、大乗仏教の空思想を考察した。さらに、大拙が大乗仏教を重視する根拠を考察するために、原始仏教から大乗仏教に至る過程で、大乗仏教が基本とする人間観、人生観に焦点を当てた。

大乗仏教の空思想は、上座部仏教における諸法無我とは異なり、空思想において、絶対肯定的といえるはたらきがあり、そのはたらきをもって今の人生を生ききることを重視している教理であることを検証した。その絶対からのはたらきが人間に現れるとき、般若の智慧と慈悲が不二となってはたらきだすことを示した。

「第五章　『大乗起信論』では、大拙が『大乗起信論』の英文翻訳をしていることと、*Sengai* にも、仙厓自身が『大乗起信論』を読んだ後に書かれた書画軸が掲載されていることから、『大乗起信論』の教義を考察した。

『大乗起信論』は、中国の大乗仏教受容において重要な位置を示す論書である。その思想は、「浄法熏習」という「空からのはたらきの絶対性」を重視するものである。

そこで、浄法熏習のはたらきを考察し、般若の智慧と慈悲が、智浄相と不思議業相という「あらわれ」となり、それが不二となってはたらくことを考証した。この「空からのはたらきの絶対性」が、禅を含む中国仏教の基本となることを示した。

「第六章　菩薩」では、大乗仏教の人間像である菩薩に焦点をあてた。大拙は菩薩行を重視し、仙厓も自らの落款に「厓菩薩」と署名していた。よって、この章において、大乗仏教の菩薩の基本概念を示し、大乗仏教における特徴の一つが、「空からの智慧と慈悲が不二となってはたらく」人間観であることを考察した。

「第七章　禅思想における不二」では、禅思想における不二を検証した。中国の禅思想の発達において、禅が仏教の修行の禅定と異なる立場をとることを論考した。そして、大拙が重視する「絶対からのはたらき」のある禅の根拠として、六祖慧能の定慧不二に焦点をあてた。そのうえで、*Sengai* に示される禅機図を紹介した。

「第八章　大拙の禅思想」では、大拙の禅思想における「絶対からのはたらき」の根拠である即非の論理を検証した。まず、空からのはたらきが不二となっている構造性を示し、大拙の思想の慈悲の強調については、大乗仏教と禅の理解が必要である旨を論じた。そこで、大拙のいう大智と大悲が、般若の智慧と慈悲を根拠にすることを示した。

「第九章　宗教経験」では、宗教経験と悟りに焦点をあてた。はじめに、大拙が宗教経験を重視する根拠を取り上げ、次に、正しい宗教経験において、自我の徹底否定によって「甦る」自己が絶対肯定の自己であることの重要性を示した。そして、禅における修道論である『十牛図』に焦点を当て、禅における悟りが、菩薩となって自利利他のはたらきをするための行であることを確認した。

「第十章　笑い」では *Sengai* で大拙が紹介した仙厓の笑いの根拠として、大乗仏教が示す笑いが、純化された感情としての笑いであることを示した。

「第十一章　禅と書画」では、書画に焦点を移し、書画を通じて制作者の人柄を見る伝統こそ東洋画の特徴である点を論じた。とくに、日本において影響力が強い南宋画は、六祖慧能を祖とする南宗禅の影響を受け、空からのはたらきを重視する伝統がある。本章では、宗教と書画との共通基盤を考察した。

「第十二章　仙厓の書画と大拙」では、南宗禅を基調とする南宗画が江戸時代に伝来したことと、仙厓の書画の特長を述べた。さらに、仙厓と白隠とを対比させ、仙厓の個性として、彼は境涯の高みに立つのではなく、みずからが高みから下りて、出会った人々の心に沿って書画を表した点を指摘した。そのうえで、仙厓の書画のもつ独自性が、大智と大悲のあらわれの方便であることに焦点を当てた。そして、仙厓とは時代と異なる大拙の仙厓観を不二の観点から考察した。また仙厓の書画を媒介にして、出光佐三と大拙がどのように響きあったのかをも検証した。

「結語」は、本論文の結論である。大拙が *Sengai* 著作に託した心は世界文化の構築であり、二元と不二は東西の思想の相違点を端的に現わす重要な概念であることを示し、大拙が不二を強調したことをあらためて述べた。

二、本論文の評価さるべき特色・意義

① 仙厓とともに江戸時代を代表する禅僧に白隠がある。この白隠と仙厓は、多くの書画を残している点で共通している。しかしその書画の風体は両者において大いに異る。それは仙厓と白隠の禅者としてのいわゆる「家風」の違いを反映している。

このことは近代日本を代表する二人の思想家、鈴木大拙と西田幾多郎にもある。そのことを示すエピソードがある。二人とも一時期、ステッキを愛用していた。ところが、そのステッキを手にして歩く姿が全然ちがっていた。西田は、ステッキを手に持って、それで一歩一歩地面を突き刺すように、非常に鋭いステッキの扱い方で、また鋭い雰囲気で歩いていた。対して大拙はステッキを軽く振り回しながら瓢々と歩いていた。姿勢も、西田はちょっとうつむき加減でステッキを突きながら歩き、大拙はステッキを振り回すように扱いながら、少し上を向くようにして歩いた、というのである。二人のそういう風体の違いは、そのまゝ二人の学風にも反映していると思われる。

そしてこの西田と大拙の違いは白隠と大拙の違いに共通している。つまり西田と白隠は相似た「家風」の持主であり、同様に大拙は仙厓と相似た家風の持主と言える。

大拙はその最後の著作である *Sengai* を情熱を傾けて著述した。その背景には、この両者に通ういわば人格的な共通性があり、したがって相互に深く理解し合える間柄であった。ここから考えると大拙の仙厓研究の内容は、仙厓の研究においても大拙の研究においても特別に重要な位置を占めていると言える。

しかしながら大拙の *Sengai* は、最晩年の著作で、そしてかつ英文で書かれたということもあって世に知られるのが遅れ、仙厓研究においても大拙研究においても十分生かされていなかった。本論文は大拙の *Sengai* をはじめて本格的に取り上げた研究で、大拙研究史においても仙厓研究史においてもその意義は大きい。

② 仙厓の書画や人物について軽妙、機智、洒脱ということがよく言われる。それが禅者としての仙厓の境涯の浅さと結びつけて語られることがあったが、それは当たっていない。それは既に先行の研究によって言われていることであるが、本論文はそれを大拙のいわゆる「大智と大悲のはたらき」として、ゆるぎないものとした。

③ 大拙は昭和二一年、昭和天皇へのご進講「仏教の大意」の中で、「仏教という大建築を載せている二つの大支柱がある、一を般若又は大智といい、今一つを大悲又は大慈と言います。智は悲から出るし、悲は智から出ます。」「大智大悲は生きたものです。」と説いた。言わんとするところは大乗仏教を大乗たらしめているのは「大智大悲からのはたらき」である、ということである。

本論文は、大拙と仙厓における、この「大智大悲からのはたらき」の大きさ、強さ、豊かさを力を込めて述べ、ひいて大乗仏教のあるべき在り方をも示唆しようとする。

④ この「大智大悲のはたらき」の由縁を探るため、仏教思想の流れを中国・印度にまで遡って明らかにしようとする。その努力には敬服に値するものがある。

⑤ 論者は仙厓が用いた「厓菩薩」という落款に注目する。「大智大悲からのはたらき」は下化衆生の「菩薩道」「菩薩行」と古来言われてきたものに外ならぬからである。これまで格別に注目されることがなかった「厓菩薩」の落款に特別の意味を認めて注目したのは論者がはじめてであろう。

三、残された課題

① 「大智大悲のはたらき」の根本を究めるためになされた仏教思想の流れの遡及的研究の努力には感嘆を禁じ得ないが、ここに多くの努力が傾注された分、仙厓の書画ひとつひとつの研究がおろそかになった感がある。この面での研究の補完が望まれる。

② 本論文中に「藝道」についての論及があるが、仙厓の書画が、「藝道論」の観点からはいかに捉えられるのかについての論者の見解ははっきりしていない。後日の解明を望みたい。

③ 仙厓の書画は、すべて菩薩行の産物であると考えてよいのだろうか。中には悠々自適の自足の楽しみとして書かれたものも多くあったのではなかろうか。いつか回答をいただきたい。

四、審査結果の要旨

本論文を、右に述べた如き諸点を含めて、着想の独創性・叙述の的確さ、構成の整合性などにわたって慎重に審査した結果、審査委員全員の一致をもって、上記学位申請者に博士（芸術学）の学位を授与するのが妥当であるとの結論に達した。